



Title	イノベーションと人工物進化 : シュンペーターとネオ・シュンペーター学派の理論的再考を通じて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	小林, 大州介
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第12089号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62256
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Daisuke_Kobayashi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）

氏名：小 林 大州介

審査委員	主査	教授	西 部	忠
	副査	教授	佐々木	憲 介
	副査	准教授	瀬 尾	崇(金沢大学)

学位論文題名

イノベーションと人工物進化—シュンペーターと

ネオ・シュンペーター学派の理論的再考を通じて

本論文（A4版全112頁、目次、序章、第1章～第6章、終章、参考文献）は、J. A. シュンペーターのイノベーション理論とその後の現代的展開を示すネオ・シュンペーター学派を中心とするイノベーション理論を「人工物進化」という新たな観点から読み解こうと試みるものである。

序章は本論文が扱う主要な三つの概念群（①人工物、文化、発明、②漸進的・系統的進化と発展段階・パラダイム進化、③経済成長と経済発展）に関する著者の定義と解釈を与える。①人工物は発明によって生じ、特定の文化における必要を満たし、その知識は社会的学習により共有されるという見方は、シュンペーターのイノベーション論に特徴的である。②18世紀啓蒙思想に端を発する「進化主義」は漸進的で定向的・決定論的進化（個体発生）を想定し、同じ過程を辿る人間の知性の発達に文化的発展段階として現れると考える思想であった。③シュンペーターの経済発展は、市場や社会の与件が不確定的に変化し、静態的均衡が攪乱される断続的現象を指しており、ネオ・シュンペーター学派はこうした経済発展観を継承している。

第1章「単線的発展論の超克としての初期イノベーション理論」は、社会学者G. タルドやシュンペーターが、18世紀啓蒙思想以来の進歩思想としてしばしば19世紀人文社会科学の理論的枠組みとなった「進化主義」（＝価値判断や定向性を含む単線的発展論）を克服しようと試みる過程で、偶発的新奇性や不連続性を導入する初期イノベーション論に到達したと論じる。

第2章「シュンペーターと伝播主義—シュンペーターの社会文化進化論に対する新解釈」は、シュンペーターが進化主義を批判した第一著書『本質と主要内容』（1908）を著すより前の、ロンドンで経済学とともに人類学、歴史学を学んだ1906～07年に、自らの社会文化進化論に伝播主義を摂取したと論じる。遠隔地点間の「同

時的発明」（人工物，言語，神話等における）に見られる類似性は移民や文化接触によりうまく説明できたため，「進化主義」は「伝播主義」的人類学によって超克されていた。シュンペーターは伝播主義を不確定性や断絶性として解釈した。

第3章「タルド，シュンペーターと発明の社会学—20世紀初頭における新規性の社会動学」では，シュンペーター，タルド，その後の発明の社会学における社会動学論が比較される。タルドやシュンペーターは卓越した創造的リーダーとその追随者という図式の下に社会動学を考察したが，発明の社会学の論者ら（オグバーン，ギルフィラン，アッシャー）は卓越した創造的主体による革新という見方を脱し，発明の累積・統合・伝達を可能にする訓練や制度といった社会文化環境を重視するようになる。その理由は，彼らが社会動学を考察する際に影響を受けたバックグラウンドが統計学，優生学，「文化進化論」へと変遷したからであった。

第4章「シュンペーターの発展概念と文化進化概念」によれば，シュンペーターの文化進化論は価値判断を含む目的論や文明論を回避しつつも，歴史の発展線や断絶性を内包する「発展の一般理論」として構想された。「発展の一般理論」における静態的・動態的側面は，『本質と主要内容』（1908），『経済発展の理論』（1912），未公刊論文 *Entwicklung* (1934) における具体例（杭上住居群，フィレンツェ絵画の進化，郵便馬車と蒸気機関車）の中で連続的・断続的側面として表現されている。文化進化論は，人工物進化とシュンペーターのイノベーション論をともに説明する。

第5章「人工物進化研究の持つ含意—認知科学，文化・技術進化論，そしてイノベーション理論—」では，社会，技術，文化，経済の領域を複合的に考察する研究対象たる「人工物」の進化の視点が経済発展論，イノベーション論に対していかなる含意を持つかを考察する。著者は，コア（中心的特性）と周辺（変異体）からなる人工物の進化モデルを仮説として提示し，人工物の技術・文化的環境（技術パラダイムと文化様式）からさらに経済的環境（市場競争（コンテスト）とプロダクツ・イノベーション）を考慮すれば，財の多様化は，市場における企業の商品差別化だけでなく，消費者による使用文脈のような文化的文脈の影響を受けると説明する。

第6章「技術・経済パラダイム論とイノベーションシステム論—ネオ・シュンペーター学派の経済進化理論」では，近年のネオ・シュンペーター学派による技術進化論を概観し，人工物進化論の応用可能性を論じる。科学，技術，商品が相互依存関係にあると見る技術・経済パラダイム論やイノベーションの生成しやすい制度や政策を探索するイノベーションシステム論は，技術だけでなく市場で選択される

「製品」に注目している。科学技術と比較すれば，人工物のデザインは非決定的であり，時にダーウィンの盲目的プロセスを必要性とするが，そうした不確実性は異なる設計レジームから生じる。

塩野谷(1995)，吉尾(2007, 2008)の従来研究は，シュンペーターの全体像を経済社会学ないし総合的社会科学として提示した。これに対して，学説史的研究（第1～4章）と進化経済学的研究（第5～6章）の両面を持つ本論文は，シュンペーターに始まり，彼と同時代の発明の社会学や伝播主義人類学から現代のネオ・シュンペーター学派までのイノベーション論を文化進化と人工物進化という視点から「発展の一般理論」として統合的に理解する。それは，経済学，社会学，人類学，考古

学，認知科学，心理学等の人文社会科学による文化進化論への学際的アプローチを目指すものである。このように，本論文は全体構想とアプローチにおいて独自性を示している。

ここで，本論文の今後の課題を列举する。まず，本論文では人工物を「工業製品」に基本的に限定した立論になっているが，完全な文化進化論を構築するためには，言語，法，慣習，制度を含む広義の人工物を対象とする必要がある。だが，そうになると，人工物のイノベーションの意味がわかりにくくなる可能性がある。全体の見通しをよりよくするため，タルド，シュンペーター，発明の社会学に関する学説史的考察とネオ・シュンペーター学派に関する理論的考察をよりスムーズに統合する方がよい。そのためには，科学技術と製品デザインを相互に関連づけるべきである。また，シュンペーターによる進化主義の超克の内容と時期を文献考証的に論証すべきである。進化主義は多義的であり，連続的，単線的，進歩的等，複数の意味を持つが，シュンペーターはどの意味の進化主義を超克したのかを明確にしなければならない。

以上のような課題は残されているものの，本論文は先に述べた独自の貢献など多くの優れた点を備えている。よって，審査担当者は満場一致で本論文が本経済学研究科の課程博士（経済学）の学位を授与するに値すると判定した。